



増井 一友（ますい かずとも） 講師

担当科目

音楽科教材研究 A（器楽指導法）

音楽科教材研究 B（器楽指導違法）

所属・職位	同志社女子大学 講師
学位	—
学歴	1976（昭和 51）年 大阪芸術大学音楽学部音楽学専攻中退
主な職歴	1977（昭和 52）年～1980（昭和 55）年 関西電力学園 社外講師 1980（昭和 55）年～現在に至る 大阪音楽大学 講師 2013（平成 25）年～現在に至る 同志社女子大学 講師
専攻（専門分野）	ギター
担当科目	教職実践演習（中・高）
研究テーマ	集団授業におけるギターの活用
教育方針	学生が音楽全体の観点からギターを見つめ、表層ではなく根本での理解を深められるよう指導したい。
所属学会・団体等	—
最近の業績 教育実践記録等 その他	<p>■『授業におけるギターの指導について』2014（平成 26）年 2月大阪音楽大学教育研究論集</p> <p>学生の楽器への興味を学問的な知識だけではなく、その演奏技術の向上とで深く持てるように指導している。</p> <p>例として、楽器の持ち方や奏法では、歴史的な楽器の形状の変化やそれに伴う保持スタイルの変化と音楽の変化など、実践と学術的な面を同時に示し、より深い理解を求める。</p> <p>また歴史的な音楽の変遷だけでなく、現代の実際の音楽現場で使われている演奏スタイルも示し、広汎な観点からギターの特徴を理解出来るよう指導している。</p> <p>教育分野に詳しいギター演奏家は数少ないが、その上あらゆるジャンルで活動している利点を教育内容に盛り込んだ指導実績を持つ。教室で多人数を対象にギター演習を行う際は常に効率向上に努めている。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 2015 (平成 27) 年 2 月 増井一友ギターコンサート Vol. 14</li> <li>■ 2014 (平成 26) 年 6 月 増井一友リサイタル (兵庫芸術センター小ホール)</li> <li>■ 2011 (平成 23) 年 増井一友ギターコンサート Vol. 3</li> <li>■ 2010 (平成 22) 年 増井一友ギターコンサート Vol. 1</li> </ul> <p>リサイタルシリーズ第 1 回。年に 4 ヶ月ごとに 3 回行リサイタルシリーズの 1 回目。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 2010 (平成 22) 年 ホセ・ルイス・ゴンサレス追悼コンサート 主催：アルコイ市</li> </ul> <p>アルコイ出身の巨匠ギタリスト、ホセ・ルイス・ゴンサレスの追悼コンサートに弟子として出演。 共演：藤井 浩</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 2009 (平成 21) 年 増井一友リサイタル「内なる想い」</li> <li>■ 2009 (平成 21) 年 大阪クラシック 2009</li> </ul> <p>大植英次プロデュース、御堂筋界限で一週間で 100 公演開催するイベント 主催：大阪クラシック実行委員会(大阪市、大阪フィルハーモニー協会地) 協力：大阪音楽大学他</p>
--	---



山本 順彦 (やまもと よりひこ) 講師・帝塚山大学 現代生活学部こども学科教授

**担当科目**

道徳教育論

所属・職位	帝塚山大学現代生活学部こども学科 教授
学位	教育学修士
学歴	<p>1980 (昭和 55) 年 広島大学教育学部小学校教員養成課程卒業</p> <p>1983 (昭和 58) 年 広島大学大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了</p> <p>1983 (昭和 58) 年 広島大学研究生</p>
主な職歴	<p>1984 (昭和 59) 年 広島大学 助手</p> <p>1985 (昭和 60) 年 親和女子大学文学部児童教育学科専任講師</p> <p>1988 (昭和 63) 年 親和女子大学文学部児童教育学科助教授</p> <p>1996 (平成 8) 年 神戸親和女子大学文学部児童教育学科教授</p> <p>2002 (平成 14) ～2009 (平成 21) 年 神戸親和女子大学大学院文学研究科 (博士課程) 専任教授「教育方法学特論」</p> <p>2005 (平成 17) ～2009 (平成 21) 年 神戸親和女子大学発達教育学部 児童教育学科教授 (組織変更)</p> <p>2009 (平成 21) 年～現在に至る 帝塚山大学現代生活学部こども学科 教授</p>

専攻（専門分野）	教育学 教育方法思想
担当科目	道徳教育論
研究テーマ	・デューイの教育理論の検討 教育の原理、内容、方法等の観点からの検討 ・西洋教育方法思想の歴史的展開過程の研究
教育方針	道徳教育の基礎理論についての理解を深めさせるとともに現代学校教育における道徳教育の実践的指導指針と実践指導についての理解を確実にさせる。
所属学会・団体等	日本教育方法学会
最近の業績	<p>著書</p> <p>■「新・教師論：学校の現代的課題に挑む教師力とは何か」（共著）2014（平成 26）年 2 月 ミネルヴァ書房刊 「養成段階でめざす教師の専門性」（担当）大学の教員養成段階で身に付け、修得すべき教師の専門性の基礎とは何かを考察している。教師の専門性は、教職就任後、長年月にわたって研鑽を積むことで高め、深められていくものであるが、養成段階（大学の学士課程・教職課程）で培うべき基礎的力量とは何か、それをどのように形成すればよいかを考えている。最初に、専門性の基礎として身に付けるべき「教養」とは何かを明らかにしている。次に、習得すべき教師としての「専門的力量の基礎」とは何か、それをどのように獲得すればよいかを、専門性のスタンダード、教師の自律性、そして協働性の 3 つの観点から探り、明らかにしている。</p> <p>■「新・教育原理」（共著）2006（平成 18）年 8 月 ミネルヴァ書房刊 教育課程は、教育内容の実践化に至って、はじめて実現されるという立場にたちながら、教育の目的及び内容との関連で、教育内容の習得過程を主体的な学びの過程として組織し、指導するための方法の構築という観点から、その原理と指導の体系を明らかにした「教育の方法を探る」を担当。</p> <p>■「教育実習 Q&amp;A」2005（平成 17）年 9 月 あいり出版 「失敗して先生や子供たちに迷惑をかけてしまわないか不安です」「指導案がしっかり書けるかどうか不安です」という 2 つの質問に答えている。</p> <p>■「現代教育方法事典」（共著）2004（平成 16）年 10 月 図書文化社（日本教育方法学会編） 本書中の「ドリル」「問題解決学習」の項目を分担執筆。</p> <p>■「授業研究重要用語 300 の基礎知識」（共著）1999（平成 11）年 8 月 明治図書刊 本書中の「出会い」「自己評価と相互評価」「系統学習」「問題解決学習」の項目を分担執筆している。</p> <p>■「教職専門叢書 ③ 教育方法の基礎と展開」（共著）1999（平成 11）年 7 月 コレール社刊 「学習形態の展開と教育的タクトの形成」（担当）授業における学習の形態を、授業展開のコミュニケーション形式の観点から、①ひとり＝個別学習、②班＝小集</p>

団学習、③学級＝一斉学習の3つ分類し、それぞれの学習形態のもつ機能について論じながら、この3つの学習形態がひとつの授業過程のなかで「交互転換」されつつ導入されていくべきこと、そのためには、教師による「教育的タクト」の発揮が肝要となることについて論じている。

■「教職科学講座 第5巻 教育方法学」(共著) 1994(平成6)年6月 福村出版刊

「教授・学習過程としての授業」(担当) 授業における教師の指導の基本的な有り様を、子どもたち自らの主体的かつ能動的な学習活動を喚起し、子どもの習得すべき教科内容と子どもとの間を「媒介する」働きかけ(教授行為)として捉え、その働きかけの最も中核を占めるのが「発問」であることを示し、その発問が有効に発動されるための基本原則を具体的実例を挙げつつ明らかにしている。

■「新教授学のすすめ 第3巻 教材解釈と発問づくり」(共著) 1989(平成元)年 明治図書刊

「指さしとしての発問」(担当) 「指さし」行為の持つ特性である「限定性」と「過程媒介性」とを手がかりとしながら、発問構成の原則が『既知』と『未知』の間の一点への限定」「思考活動の方向づけとしての『手がかり』の付与」「多様な対立・分化への指さし」といった3つの点に求められることを明らかにしつつ、その具体的実例を挙げている。「子どもをよびこむ教材解釈」教師が教材解釈をおこなうにあたって、「当該の教材で何を『教えたい』のかを明確化することの必要性」「子どもたちの活発な習得活動を喚起するために、教師が教材解釈の段階で、子どもたちを『よびこんで』、彼らがどのように多様な解釈を出してくるかを予想しつつ教材解釈することの肝要であること」について述べている。

■「授業の構想と展開のタクト」(共著) 1987(昭和62)年4月 ぎょうせい刊  
「教材解釈と指導案づくり」(担当・共同執筆) 小学校1年国語科の文学教材「ためきの糸車」を直接の分析と検討の対象として、教師の発問にに対して予想される子どもからの応答を視野に入れた事前の教材解釈を授業に先立つ「教授行為のタクト」として捉え、そのあり方について実際の授業実践に即しつつ分析・検討を加えている。「授業展開における応答的タクト」(担当・共同執筆) 小学校4年理科の教材「空気とかさの温度」の授業実践を直接の分析・検討の対象として、子どもたちの自然現象への着目→現象をめぐる予想と仮説→確かな証拠に基づいた判断と認識という科学的認識の形成過程において教師の指導技術はどのように発揮されなければならないのかを「応答的タクト」の側面から分析・検討している。

■「現代授業研究大事典」(共著) 1987(昭和62)年3月 明治図書刊  
本事典中の「エッセンシャルリズムとプログレッシヴィズム」「系統学習と経験学習」「発達段階」「問題解決学習」といった、アメリカの児童中心主義教育ならびにわが国の戦後新教育に関連する諸項目の分担執筆を行っている。

■「授業をつくる教授学キーワード」(共著) 1985(昭和60)年4月 明治図書刊

本書中の「問題解決学習」「内発的動機づけと外発的動機づけ」といった、経験主

	<p>義教育理論に関わりの深い教授学用語の 2 項目を著者吉本均と共同執筆している。</p> <p>■「講座 授業成立の技術と思想 4 教授行為と能動的学習の成立」(共著) 1984 (昭和 59) 年 4 月 明治図書刊</p> <p>「能動的学習の成立」(担当) わが国の戦後新教育が、その指針としたアメリカの進歩主義教育運動の理論的基礎となった、デューイ教育思想のうち、その「興味論」「経験と教育の理論」を検討し、子どもの学習活動の能動化のために、デューイ理論から学び、継承し得るものが何かを明らかにした。</p> <p>■「教授学重要用語 300 の基礎知識」(共著) 1981 (昭和 56) 年 5 月 明治図書刊</p> <p>本書中の「教育内容の現代化」「単元」「螺旋形カリキュラム」といった、アメリカ教育学における教育課程理論に深く関連を持つ項目を分担執筆している。</p>
論文	<p>■「デューイ道德教育論における「倫理の教授」の位置」2003 (平成 15) 年 8 月 論説資料保存会「教育学論説資料」第 9 号</p> <p>下記(学術論文 26)の「デューイ道德教育論における『倫理の教授』の位置」の採録である。</p> <p>■「「デューイ道德教育論における「倫理の教授」の位置」1990 (平成 2) 年 3 月 神戸親和女子大学「児童教育学研究」第 18 号</p> <p>学校における教育活動全体を通じて道德教育を実施すべきであるという立場を基本的には取るデューイが、「道德の直接教授」としての「倫理の教授」について論述した論文の内容を辿りつつ、彼が、「道德の直接教授」が可能なものであるとすれば、どのような内容・方法をもつものとして構想・実施されるべきものであると捉えているかを見ることで特設の「道德の時間」の有り様を考えるうえでの指針を探っている。(pp.1~11)</p> <p>■「「こころの居場所」創造のための実践的教育学(Ⅲ) -デューイの「経験と教育」の理論に学ぶ-」1997 年 (平成 9) 3 月 神戸親和女子大学「児童教育学研究」第 16 号</p> <p>「こころの居場所」創造のための実践指針を求めるために、「社会的環境」における「共同的学习」創造の有り様について、デューイの経験の原理「相互作用の原理」に立脚した「社会的環境」に関する見解に学びつつ、論究を加えている。(pp.81~100)</p> <p>■「「こころの居場所」創造のための実践的教育学(Ⅱ) -デューイの「経験と教育」の理論に学ぶ-」1996 (平成 8) 年 10 月 神戸親和女子大学「研究論叢」第 30 号</p> <p>「こころの居場所」創造のための実践指針を求めるために、デューイが自らの「教育と経験」の理論における経験の原理である「相互作用の原理」に立脚しつつ展開した、生活経験的な活動としての共同的な学習活動が繰り広げられる「学校」「教室」のあり方についての見解に学びながら、「物理的環境」としての「学校」「教室」を子どもたちの「こころの居場所」として創造していくための方途を探っている。(pp.181~203)</p>

■「デューイ指導論の再検討「指導」概念の再構成のために－」1996（平成8）年3月 日本教育方法学会「総合科研(A) 教育方法学研究における『知の枠組』（パラダイム）に関する学際的・総合的研究最終報告書」

下記(学術論文20)の「デューイ指導観の教授学的検討」の要点をまとめることで、本テーマでの研究の最終報告書としている。(pp.149～154)

■「「こころの居場所」創造のための実践的教育学序説－デューイの「経験と教育」の理論からその指針を学ぶにあたって－」1996（平成8）年3月 神戸親和女子大学「児童教育学研究」第15号

学校教育における現今の深刻な子どもたちの「問題状況」すなわち「いじめ」「不登校・登校拒否」の根本原因が「受験体制」下の教育のなかでの、学校、教室における子どもたちの「居場所」喪失に求められることを明らかにしたうえで、その対応として文部省が「カウンセリング」的対応を過度に強調することに対して批判を加え、その解決策が「学校」「教室」を教師と子ども、子ども相互の豊かな「人間的交流」を保障する「安心の居場所」づくりにこそ求められることを強く強調している。そして、その創造のための指針をデューイの「教育と経験」の理論に求めつつ、「本論」を展開するにあたっての展望と見通しを語っている。(pp.52～70)

■「デューイ指導観の教授学的検討」1995（平成7）年3月 神戸親和女子大学「児童教育学研究」第14号

90年代の半ばごろより、わが国の教育界において、生活科教育論や新しい学力観の主張のもとで、「授業観の変革」を求めるとして、授業における教師の指導性の弱体化を図る動きが生まれている。授業における「指導」ならぬ「支援」の強調が、まさにその典型である。そこで、教育や授業において「指導」のもつ本来的な意味および意義を明らかにすべく、生活科教育論や新しい学力観の理論的基礎になっていると考えられる。デューイの指導論を検討・吟味することをとおして、デューイの指導観が、決して、わが国の今日の授業論における「支援観」を支援するものではなく、「間接的指導」としての適正なる「指導観」を堅持し、主張する理論であることを明確化しようとしている。(pp.1～37)

■「デューイ「トランズアクション」論の教授学的検討－「トランズアクション」概念の検討を中心に－」1994（平成6）年 論説資料保存会「教育学論説資料」第9号

下記(学術論文10)の「デューイ『トランズアクション』論の教授学的検討－「トランズアクション」概念の検討を中心に－」の採録である。

■「低学年カリキュラムの内容に関する教授学的研究〔Ⅴ〕－デューイにおける「遊」「仕事」「知的探究」の連関と連続的發展(3)－」1994（平成6）年3月 親和女子大学「児童教育学研究」第13号

「小学校低学年カリキュラム」構想の発達論的基礎を得るべく、児童期から青年期への知的発達移行の過程についてのデューイの見解を明らかにしている。とりわけ、児童期の教育内容・方法の基本的特質を明らかにすべく、それが連続的に移行するとされる青年期における子どもの発達特性とその特性に応じた教育内

容・方法のあるべき姿についてのデューイの見解に考察を加えている。(pp.1～22)

■「低学年カリキュラムの内容に関する教授学的研究〔Ⅳ〕－デューイにおける「遊」「仕事」「知的探究」の連関と連続的發展(2)－」1994(平成6)年2月 親和女子大学「研究論叢」第27号

「小学校低学年カリキュラム」構想の発達論的基礎を得るべく、とりわけ児童期の知的発達過程および特質についてのデューイの見解を明らかにするとともに、その発達の特性に応じたこの時期の教育内容・方法についての彼の見解にも考察を加えている。(pp.140～150)

■「低学年カリキュラムの内容に関する教授学的研究〔Ⅲ〕－デューイにおける「遊」「仕事」「知的探究」の連関と連続的發展－」1993(平成5)年3月 親和女子大学「児童教育学研究」第12号

幼・小の連携を企図するわが国の「低学年カリキュラム」改革の動きに対応すべく、幼児期から児童期へ、そして児童期から青年期への連続的成長観に立った「小学校低学年カリキュラム」構想のための発達論的基礎を得るために、知的発達についてのデューイの見解を検討・吟味している。本論文においては、とりわけ乳幼児期の知的発達過程および特質についてのデューイの見解を考察している。(pp.1～21)

■「デューイ相互作用論の教授学的検討－主体－主体の教育的関係成立の観点から－」1992(平成4)年 論説資料保存会「教育学論説資料」第6号

下記(学術論文8)の「デューイ相互作用論の教授学的検討－主体－主体の教育的関係成立の観点から－」の採録である。

■「授業の問題探究的構成と発問」1992(平成4)年3月 親和女子大学「児童教育学研究」第11号

下記(学術論文11)の「授業の問題探究的構成」において明らかにされた、子どもの自主的学習活動喚起の方法論としての「問題探究的授業構成」の具体的な有り様を「発問」系列による授業展開の構成として捉え、その発問系列構成のための基本原則を授業展開の順次性、すなわち授業の「導入」「展開」「ヤマ場」の各場面に即しつつ明らかにし、問題探究的な授業実践のための指針を示している。(pp.53～72)

■「低学年カリキュラムの内容に関する教授学的研究〔Ⅱ〕－デューイにおける遊びと仕事の統一－」1992(平成4)年2月 親和女子大学「研究論叢」第25号

デューイにおいては、初等教育段階、とりわけその低学年段階の教育における内容・方法を構想する際に、幼児期から児童期への連続的成長観の立場に立って、幼児期における中心的活動である「遊び」と児童期における中心的活動としての「仕事」とが統一的に捉えられていることを明らかにしたうえで、このような見解が、わが国の小学校低学年カリキュラムの構成視点として示唆を与える点を挙げていく。(pp.146～167)

■「低学年カリキュラムの内容に関する教授学的研究－デューイ「カリキュラム」論に学ぶ－」1991(平成3)年3月 親和女子大学「児童教育学研究」第10号

デューイ理論の「正統的継承」として自らの所論を位置づける「生活科教育理論」に対して批判的検討を加えるべく、デューイによる児童期の教育内容・方法構想の骨子を示しつつ、彼の理論の特質が「『知的』能動性かつ主体性の形成」を企図する内容・方法の理論であると捉え、「生活科教育論」の「体験」偏重の姿勢に対して批判的検討を加えている。(pp.1~21)

■「授業の問題探究的構成」1990（平成2）年3月 親和女子大学「児童教育学研究」第9号

授業を子どもたちの自主的な学習の過程として構成するための基本的な教授学的視点が授業を問題探究的な過程として構成することにあるといこうとを明らかにするために、デューイ「問題法」の批判的検討をおこないつつ、かつまた、旧東独における教授学理論としての「問題探究授業」の構成理論から示唆を得つつ、子どもたちの子どもたちの自主的、能動的な学習過程の組織方法のあり方を探究している。

■「デューイ「トランズアクション」論の教授学的検討 - 「トランズアクション」概念の検討を中心に -」1989（平成元）年2月 親和女子大学「研究論叢」第22号

デューイ相互作用論が単なる「相互作用」(i n - t e r a c t i o n)の理論に止まるものではなく、相互主体的な意味合いを深く有する「トランズアクション」( t r a n s a c t i o n : 相関作用)の理論にまで発展させられたことについて論究し、その「トランズアクション」概念を検討することによって、相互主体的な教育的関係に関する理論構築に与える示唆が何であるかを明らかにしている。(pp.171~187)

■「デューイの道徳教育観 - 授業における訓育の観点から -」1988（昭和63）年1月 親和女子大学「児童教育学研究」第7号

授業における訓育の観点から、デューイの道徳教育論を分析、検討している。デューイ理論が道徳的価値規範の注入・訓練としての「道徳の直接教授」を排して、あらゆる教科の授業の内容ならびに方法に内在する訓育的作用をとおしての道徳教育、すなわち全教育活動を通じての道徳教育の可能性を強調していることを論究し、その内実を明らかにすることで今日の道徳教育論が学び継承する点を探っている。(pp.62~78)

■「デューイ相互作用論の教授学的検討 - 主体-主体の教育的関係成立の観点から -」1986（昭和61）年11月 親和女子大学「研究論叢」第20号

現代学校の教育(授業)における教師と子どもとの関係を捉える場合に、近代教育学における教育的関係把握の図式としての「主観-客観」としての関係把握を超越して、「主体-主体」(間主観)の関係把握に立つことの重要性を明らかにしている。その際に、デューイの「相互作用」論に検討を加え、彼の理論が相互主体的な教育的関係把握に基づくものであることを明らかにし、そこから得られる示唆の大きいことを指摘している。(pp.307~320)

■「教育的興味」に関する研究」1983（昭和58）年5月 広島大学大学院教育学研究科「修士論文抄」



	<p>1983年2月に広島大学大学院教育学研究科に提出された修士論文『『教育的興味』に関する研究』の要約である。(pp.18～21)</p> <p>■ 「『教育的興味』に関する研究 -デューイ興味論の検討を中心に-」1983(昭和58)年3月 中国四国教育学会「教育学研究紀要」第28巻</p> <p>学校教育における子どもたちの学習活動の能動化、活性化の重要な手だてとしての「教育的興味」の本質を探るために、デューイの興味論に検討を加え、その特質と問題点とを明らかにしている。とりわけ、デューイ興味論は、彼が批判の対象としたヘルバルト派の興味論と異なって、「学習者と学習対象との同一化するところに真の興味が生起する」とする点に特質があることを論じている。(pp.101～103)</p> <p>■ 「『教育的興味』に関する研究」 1983(昭和58)年2月(修士論文)</p> <p>現代の学校教育において、子どもたちの学習活動を動機づけ、活性化するための重要な手だてとして「教育的興味」に着目し、その有り様を追究している。「教育的興味」の本質を究明するにあたって、ヘルバルト派の興味論と対比させつつジョン・デューイの興味論の特質を明らかにすることによって、彼の興味論から今日学び継承し得る点と克服し発展させられるべき点とを明らかにしている。そして、発展させられるべき点については、シュチューキナ、G. I. の「認識興味論」を手がかりとして現代学校における子どもたちの強力な学習動機としての学習興味のあり方について論究している。</p>
<p>教育実践記録等</p>	<p>■ 「『常に現在である』過程としての教育 -デューイ「経験」概念の教育学的検討-」2013(平成25)年2月 帝塚山大学「現代生活学部紀要」第9号</p> <p>デューイが影響を受けたミードの時間論を検討し、デューイの「経験」概念が「常に現在である」過程として発想されていることを明確にするるとともに、この発想が現在の教育過程の新たな創造にいかなる示唆を与えるものであるかを検討している。(pp.85～92)</p> <p>■ 「若い力に期待します」2010年2月 帝塚山大学「学生相談室年報」第3号</p> <p>帝塚山大学学生生活委員会の委員として、現代生活学部こども学科の学生についての印象をまとめ報告した。</p> <p>■ 「人間を道徳的にする観念 -デューイの「教育における道徳原理」の真意-」2009(平成21)年3月 神戸親和女子大学「児童教育学研究 第28号・教育専攻科紀要 第13号合併号」</p> <p>“デューイの言う「道徳的観念(moral idea)」を「人間を道徳的にする観念」として解釈することによって、彼が一般的な教科内容やその教授法の持つ訓育力の中に真の道徳的作用の存在を認めていた点を浮き彫りにしている。(pp.77～86)</p> <p>■ 「小学校教育実習を通して」2009(平成21)年2月 神戸親和女子大学「教育ひろば」第22号</p> <p>2008年度に神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科が実施した「小学校教育実習指導」の内容と成果について報告した。</p> <p>■ 「島嶼部実習に寄せて」2009(平成21)年2月 神戸親和女子大学「教育ひろば」第22号</p>

	<p>2006 年度に神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科が実施した「島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト」の「参観実習」 t p 「本実習」の内容と成果について報告した。</p> <p>■『「島嶼部実習」に立ち会って』2008（平成 20）年 2 月 神戸親和女子大学「教育の広場」第 21 号</p> <p>平成 17 年度に神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科が実施した「島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト」の「参観実習」と「本実習」の内容と成果について報告した。</p> <p>■「授業の応答的関係における「愛と認識」（Ⅱ）」2007（平成 19）年 3 月 神戸親和 女子大学「大学院研究紀要」第 3 巻</p> <p>下記(学術論文 29)論文の続編である。本編においては、母と子の愛と情感に満ちた「応答的関係」こそが、豊かな「人間的認識」を子どもの内部に形成するというペスタロッチの見解に学びながら、授業における認識促進的な応答的関係構築の視点を探っている。(pp.43～50)</p> <p>■「授業の応答的関係における「愛と認識」」2007（平成 19）年 3 月 神戸親和女子大学「児童教育学研究第 26 号・教育専攻科紀要第 11 号合併号」</p> <p>現在の子どもたちについての憂うべき「問題状況」に鑑み、教育の過程を「人間的な学びの展開される過程」としていかに構想し、計画化することが可能であるかという「教育課程構想」を視野に入れつつ、そのあり方を教授における「愛と認識」についてのペスタロッチの見解に学びながら探究している。本編においては、ペスタロッチの所論にしたがいながら、「直観－言語－愛」の三者の結合が、人間(子ども)の内部に真の認識を成立、発展させることに繋がるという教授学的視点に考察を加えている。(pp.95～105)</p> <p>■「デューイにおける「民主主義と教育」－総合学習における問題解決学習の位置を求めて」2006（平成 18）年 3 月 神戸親和女子大学「大学院研究紀要」第 2 巻</p> <p>「総合的な学習の時間」の「内容および方法」の計画化、組織化にあたって、その学びの過程を、民主主義社会の構成員としての資質・能力と考えられる、科学的精神に貫かれた民主主義的な「科学的批判能力」の育成を可能とする過程として、いかに構想し、組織すればよいかを、デューイの「民主主義と教育」についての見解に学びながら明らかにしようとしている。本論考においては、デューイの「適応」概念を検討することによって、彼の「問題解決学習」理論が、単なる「現状適応主義」に毒された理論ではなく、人間が自らの置かれた環境を批判的に乗り越えようとする発想をその内実を含む理論であることを解明している。(pp.33～38)</p> <p>■「平成 17 年度大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成 GP）島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト報告書Ⅰ」（共著）2006（平成 18）年 3 月 田中印刷出版</p> <p>文部科学省による平成 17 年度の「大学・大学院における教員養成推進プログラム」の一つとして、神戸親和女子大学が実施した「島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト」のうち、「参観実習」の部分について、その内容と成果を報告した。</p>
--	---

	<p>■「平成 17 年度大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成 GP） 島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト報告書Ⅳ」（共著）2007（平成 19）年 2 月 田中印刷出版</p> <p>文部科学省による平成 17 年度の「大学・大学院における教員養成推進プログラム」の一つとして、神戸親和女子大学が実施した「島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト」のうち、「本実習」の部分について、その内容と成果を報告した。</p> <p>■「自己の自己に対する対立」2002（平成 14）年 1 月 親和女子大学「教育のひろば」第 15 号</p> <p>大学院で学び研究することの意義について論じている。</p> <p>■「「こころの居場所」創造のための実践的教育学 - デューイの「経験と教育」の理論に学ぶ -」1996（平成 8）年 3 月 神戸親和女子大学「教育専攻科紀要」創刊号</p> <p>学校教育における子どもたちの「こころの居場所」創造のための実践原理ならびに指針を求めべく、デューイの「教育と経験」の理論にその手がかりと示唆を求めつつ展開されているのが本論文以降の継続的研究である。本論文においては「こころの居場所」創造のための基本原理がデューイの「教育的経験」の原理、すなわち「連続性の原理」ならびに「相互作用の原理」に求められることを明らかにしたうえで、その第一の原理「連続性の原理」に立脚しつつ、子どもの「こころの居場所」創造のためには、「未来に向かって現在をこそ生きる」ということを可能にする「学校」「教室」の創造こそが求められることを、デューイの見解に示唆を得ながら説き明かしている。(pp.51~63)</p> <p>■「型に入り型を出る」1995（平成 7）年 1 月 親和女子大学「教育のひろば」第 8 号</p> <p>学生の教育実習に対する感想をのべたものである。</p> <p>■「授業は「答」からはじまる」1994（平成 6）年 1 月 親和女子大学「教育のひろば」第 7 号</p> <p>学生の教育実習に対する感想を述べたものである。</p> <p>■「発表要旨 低学年カリキュラムの在り方 - デューイ「カリキュラム」論に学ぶ -」1993（平成 5）年 6 月 日本デューイ学会発行所、「紀要」34 号</p> <p>一連の「低学年カリキュラムの内容に関する研究」の成果をまとめて発表した(1992 年日本デューイ学会関西地区研究会 於甲南女子大学)内容の要旨である。</p> <p>■「授業分析」1993（平成 5）年 1 月 親和女子大学「教育のひろば」第 6 号</p> <p>教育実習生の「研究授業」に分析を加えている。</p> <p>■「授業分析・ヤマ場へのアタックとゆさぶり」1992（平成 4）年 7 月 明治図書『授業と学習集団 3』</p> <p>授業におけるヤマ場の創出にあたって、教師の指導としての「アタック」と「ゆさぶり」と重要な働きをなすことについて、現場実践からの報告を分析しつつ論じている。</p> <p>■「授業分析・ヤマ場へ追い込む」1991（平成 3）年 5 月 明治図書『授業と学習集団 2』</p>
--	--

	<p>「ヤマ場のある授業づくり」についての現場実践の報告に対して分析を加えている。</p> <p>■「教育詩(マカレンコ全集Ⅰ・Ⅱ) 本館所蔵文献案内」1989(平成元)年3月 親和女子大学付属図書館「一ツ嶽山」第12号 親和女子大学付属図書館の依頼に応じて、その所蔵文献である『マカレンコ全集』所収の「教育詩」の内容を解説・紹介している。</p> <p>■「子ども主体の発問を」1989(平成元)年1月 親和女子大学「親和フォーラム」 専攻する教育方法学領域の紹介文である。研究領域のひとつである「発問」研究の重要性を説いている。</p> <p>■「どんな授業を「よい授業」と感じるか」1989(平成元)年1月 親和女子大学「教育のひろば」創刊号 学生の教育実習での研究授業についての感想を述べたものである。</p> <p>■「書評 吉本均著授業成立入門－教室にドラマを！」1988(昭和63)年3月 親和女子大学「児童教育学研究」第6号 吉本均著『授業成立入門』の内容紹介を行っている。子どもの成長・発達と教師による教育的指導とが密接に関連するという氏の主張を浮き彫りにしている。</p> <p>■「授業展開における教師の指導技「タクト」の実証的研究－文芸「ためきの糸車」の授業分析を中心として－」(共著)1985年3月 広島大学教育学部学部・付属共同研究体制「研究紀要」13号 下記(著書欄2)の『授業の構想と展開のタクト』所収の「教材解釈と指導案づくり」の基になった研究論文である。(pp.9～20)</p> <p>■「「教育的興味」に関する研究(3)－子どもの認識興味の形成と発問構成の原則－」(共著)1985(昭和60)年3月 中国四国教育学会「教育学研究紀要」第30巻 子どもたちの「認識興味」を形成するための指導の具体的な手だてとして、教師による発問が重要な役割を担うことについて論じ、その構成原則を明らかにしている。(pp.124～127)</p> <p>■「授業展開における教師の指導技「タクト」の実証的研究－対立・分化の組織と集団思考の深化を中心に－」(共著)1984(昭和59)年3月 広島大学教育学部学部・付属共同研究体制「研究紀要」12号 下記(著者欄2)の『授業の構想と展開のタクト』所収の「授業展開における応答的タクト」の基になった研究論文である。(pp.1～11)</p> <p>■「「教育的興味」に関する研究(2)－授業過程の問題探究性と認識興味の形成」1984(昭和59)年3月 中国四国教育学会「教育学研究紀要」第29巻 授業の問題探究的構成が子どもの学習興味の生起の重要な源泉として捉えられることを明らかにしている。「デューイ問題法」における興味把握の問題点を明らかにしつつ、それを克服する視点としてソビエト、東独で理論化されている「授業の問題探究的構成」における「認識興味」の形成の観点手がかりになることを論じている。(pp.118～121)</p>
--	---

その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 枚方市立枚方小学校公開授業研究会 指導助言者 2008（平成 20）年 1 月</li> <li>■ 神戸親和女子大学公開講座講師 2006（平成 18）年 8 月</li> <li>■ 文部科学省による 2005（平成 17）年度の「大学・大学院における教員養成推進プログラム」の一つとして、神戸親和女子大学が実施した「島嶼部等宿泊体験型教育実習プロジェクト」に参加。 「参観実習」及び「本実習」の部分についてその内容と成果の報告を行った。</li> </ul>
-----	---